

## 実践事例

# 「仲間とともにかかわり合い、心と体をはずませて表現する子どもの育成」

～5年 表現運動「はげしい動きの世界」の実践を通して～

鳥取市立美保小学校 門脇 大輔

## 1 はじめに

### (1) 主題設定の理由

新学習指導要領では、これまでの「生きる力」の育成という基本方針は残しつつ、「体育で何を教えるのか」という説明責任と体力低下の問題に対応して、「技能」「知識」「体力」が重視され、内容が明確に示された。つまり、「問題解決能力（考える力）」と「基礎・基本の習得」という相反する両者の融合が求められている。

表現運動は、低学年の「表現リズム遊び」、中高学年の「表現運動」で構成され、主内容として「表現」「リズム」「フォークダンス」の3つで構成されている。小学校ではこれらのいろいろな踊りを体験し、各々の特性にふれることがねらいとなる。その内容は、子どもの発達に応じて次の点を重視している。

低学年では、「表現リズム遊び」と「リズム遊び」の体験を通して多様な身体感覚やリズムに乗って踊る能力、コミュニケーション能力などが培えるようにする。中学年では、題材の特徴をとらえた多様な感じの「表現」と、全身でリズムに乗って踊る「リズムダンス」を中心に、仲間とかかわり合いながら即興的に踊る体験を大切にする。高学年では、「表現」の個人やグループの持ち味を生かした題材の選択や簡単な「ひとまとまりの表現」への発展、また「フォークダンス」の学習を通して地域や世界の文化に触れるなど、拡大する個の違いや関心に対応した進め方や交流を工夫し、中学校の学習へとつなげていくことが大切である。特に、今回中学校1・2年でのダンスの必修化が示されたことにより、小学校期の子どもに表現運動の楽しさを十分体験させて、中学校へとつなげていくことが重要である。

しかし、実際は、学年が進むにつれて恥ずかしさや、どのような動きで表したらいいかわからないといった理由でなかなか動けないといった姿も見られる。また、指導者自身が身につけさせたい動き（学習内容）が不明確で表現運動に取り組みにくいといった現状もある。

そこで、身につけさせたい動き（学習内容）を明確にし、子どもたちがかわり合い「友達と一緒に動く」「友達や自分の動きのよさを感じる」ことを大切にしながら、表現運動のもつ自己表現することのすばらしさを感じさせたいと考えた。そして、仲間とかかわり合い、心を解放し体を思いっきり動かすことのすばらしさを感じることで、体育の学習や日常生活への意欲を高め、自己表現できる児童の育成に努めたいと考え、本テーマを設定した。

### (2) 研究の視点

#### ①学習内容の明確化

児童に身につけさせたい力を明確にし、目指す動きに対する学習内容を計画的に指導することで、基本的な技能を身につけ、満足感や達成感を味わわせることができると考える。

#### ②効果的な指導

基礎的な技能の定着や運動に親しむ資質や能力の基礎となる「確かな力」が身につくように、教師の指導言を吟味し、積極的に関わり、教具の工夫を通して主体的な学びを促すことができると考える。

#### ③言語活動の充実

グループやペアでの話し合いや、活動の場の設定を行うことで、学び合いによって技能の習得ができたり、仲間とともに一緒に運動する喜びを味わわせたりすることができる。考える。

## 2 研究の実際

(1) 単元名 はげしい動きの世界 (5年 表現運動)

(2) 単元の目標

動きを連続させたり、変化させたり、メリハリをつけたりしながら、表わしたいものの特徴が出る動きを、ひとまとまりの動きで表現することができる。【運動の技能】

はげしい感じのイメージを広げ、そのものになりきって踊ったり、友だちと気持ちを合わせて踊ったりすることで、表現運動の楽しさを体感しようとする。【関心・意欲・態度】

一番表したい感じを強調する動きやひとまとまりの動きを工夫したり、友だちと気持ちを合わせたりしている。【思考・判断】

(3) 学びへの働きかけ (指導の意図)

### 単元構成

前半は、はげしい感じの動きのイメージを全員で共有しながら即興的に表現する時間を多く確保する。その際、「体のくずし」「リズムのくずし」「空間のくずし」「人間関係のくずし」という観点で身につけさせたい動きを指導する。後半は変化と起伏のある「ひとまとまりの動き」に挑戦し、友だちと一緒に気持ちを合わせて踊る楽しさを味わえるようにする。この単元を通して、心に感じたことを自分の体と動きで表現したり、友だちと気持ちを合わせて踊ったりして、表現運動の楽しさを体感させたい。

### よい動きのめやす

よい動きをイメージしやすいように「ダンサーズボード」(空間のくずし、体のくずし、リズムのくずし、人間関係のくずし)を提示し、自分の動きを高めたり、友だち同士で教え合ったりする場面でよい動きのめやすとして活用する。

### イメージづくり

一人一人が思いついたイメージをクラス全体に広げ、内容を豊かにしていく(イメージバスケット)。また、イメージバスケットからおもしろい動きになりそうな題材を選び、イメージカルタを作らせる。児童が作ったカルタに教師が作ったカルタを加え、学習中に即興表現の際に使用し、自分たちのイメージを動きにつなげさせる。

### 作品づくりのためのカード

活動2の作品づくりでは、友だちと気持ちを合わせて、「はじめ・なか・おわり」のひとまとまりの動きで踊れるよう、動きのヒントとなる絵や言葉や文をメモする3枚のカードを使用させる。

### 言語活動

本単元では「はげしい動き」のイメージを広げ、2人組、4人組、8人組と人数を増やし、多くの友達とかかわりながら踊っていく。7時(本時)ではきょうだいグループを作り、お互いの表したい感じが強まるようメインの動きをサポートする動きをさせる。見せ合いの場面では、あらかじめ見合うペアを決めておき、動きのよさやアドバイスを伝え合わせる。そして、見られていることの心地よさを感じさせたい。また、言語や動きを通して友達と気持ちを交流し合えるようにしたい。

(5) 研究の考察

① 学習内容の明確化

「はげしい動きの世界」は、日常生活の様々な出来事や自然現象などから自由にイメージを広げ、動きに変えていく楽しさがある。そこで、急変する感じや変化のある動きをみんなで身につけながら、即興的に表現したり、変化と起伏のある「ひとまとまりの動き」にしたりして、踊る楽しさを味わえるよう単元を構成した。

また、身につけさせたい力を明確にするために、よい動きのめやすとして「ダンサーズボード」(空間のくずし、体のくずし、リズムのくずし、人間関係のくずし)を作成した。指導者と子どもがよい動きのイメージを共有したり、2人組での即興表現のめやすにしたり、友だち同士で教え合ったりする場面でよい動きのめやすにしたりして活用した。単元前半「できる」では、「体のくずし」「リズムのくずし」「空間のくずし」を意識しながら即興表現を中心に動いていった。その際もダンサーズボードで確認しながらよい動きをしている子どもをほめたり、全員でその子の動きのまねをしたり、教師とのかけ合いにより、よい動きを導き出したりした。単元後半のグループで「ひとまとまりの動き」を作って踊るときには「人間関係のくずし」も加えて4つのくずしを意識することで、自分たちが表したい感じをより強めるように工夫するようにした。



【単元の流れと評価の計画】				【ダンサーズボード】				
	1	2	3	4	5	6	7 (本時)	8
主なねらい	・学習の見通しを持つ。	・「はげしい感じ」のいろいろなイメージを、「ひと流れの動き」で即興的に踊る。			・表したい「はげしい感じ」のイメージや場面を「簡単なひとまとまりの動き」にして踊る。			・発表会をしよう
核となる学習内容	・学習の進め方 ・様々な体の動きを知る。	・イメージを 広げる。	・即興的に 踊る。	・グループで工夫して 即興的に踊る。	・イメージを 見つける。	・表したい 感じを工夫して踊る。	・サポートする動きを 考える。	・ひとまとまりの 動きを発表する。
学習活動(「わかる・できる・ためす」) ／ 「いかす・チャレンジする」	・学習の見通しを持つ。  ・円形コミュニケーションをする。  ・はげしい感じを自由に踊ってみる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人でゆったりとほぐす。</li> <li>・2人で仲良くリズムカルに踊る。</li> </ul> <p>学習のめあて確認</p> <p>【活動1】</p> <p>はげしい動きのイメージをふくらませて、思いつくだまにおどる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「はげしい感じ」のイメージを広げ、思いつくだまに踊る。</li> <li>・2人組でカルタを使って即興的に踊る。</li> <li>・2人組や4人組で気に入ったイメージで踊る。</li> <li>・友だち同士で見せ合う。</li> <li>・気に入ったカルタを選んで踊ってみる。</li> <li>・見せ合っただアドバイスし合う。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・2人で仲良くリズムカルに踊る。</li> <li>・はげしい感じを即興的に踊る。</li> <li>・4つのくずしを意識して、動いてみる。</li> </ul> <p>学習のめあて確認</p> <p>【活動2】</p> <p>・グループで表したい感じを中心に「簡単なひとまとまりの動き」にして踊る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気に入った動きを思い出しながら踊り、共通のイメージを見つけてみる。</li> <li>・一番表したいところがよく分かるように、感じを強めて工夫して踊る。</li> <li>・グループの動きを工夫するためにサポートし合う。</li> <li>・全体で見せ合い、アドバイスし合う。</li> </ul>			発表会
		振り返り						
評価の計画	関 思 技	①			①		②	③
具体的な評価規準	関心・意欲・態度	思考・判断			技能			
	①はげしい感じのイメージを広げている。 ②グループの友だちと気持ちを合わせながら踊ろうとしている。 ③クラス全体で発表会を成し遂げた喜びを分かち合おうとしている。	①友だちのよい動きに気づき、自分の動きの中に取り入れている。 ②一番表したい感じを強調する動きをしたり、他のグループをサポートする動きをしたりしている。			①イメージを素早く動きに変えることができる。 ②感じを強めたり、気持ちを込めたりしておどることができる。 ③表したい感じに合った動きや続け方を工夫して踊ることができる。			

## ② 効果的な指導

### (ア) 指導言

表現運動の特性の一つに「言葉を介さないコミュニケーション」が挙げられる。言葉による伝達や表現が中心である子どもたちに「心と体をつなげること」「イメージと動きをつなげること」を身につけさせるためには、教師の指導言が非常に重要となる。そこでよい動きのめやすとして挙げた「4つのくずし」を身につけさせるための指導言集を作成し、実践に役立てた。(表1)

表1

#### 〈身体のかずし〉

- ・つま先から髪のかの先まで ・おへそも踊ってる? ・背骨も〇〇になってる? ・大げさの3乗
- ・下を見たり上を見たり ・前を見たかと思うと後ろを見る ・ジャンプしたときに手で表現
- ・ジャンプの方向は上ばかりじゃない ・非日常の動き ・表現の世界では何でもできる
- ・顔もなりきってる? ・首はどう動いてる?

#### 〈空間のかずし〉

- ・自分の居場所をつくらない ・人のいないところで踊ろう ・高い動きや低い動き ・ダイナミックに空間を使おう
- ・友達と直線や円で並ぶのはやめよう ・正面をつくらない ・目線を一定にしない
- ・目線を上や下、斜め、自分、友達といろいろ変える

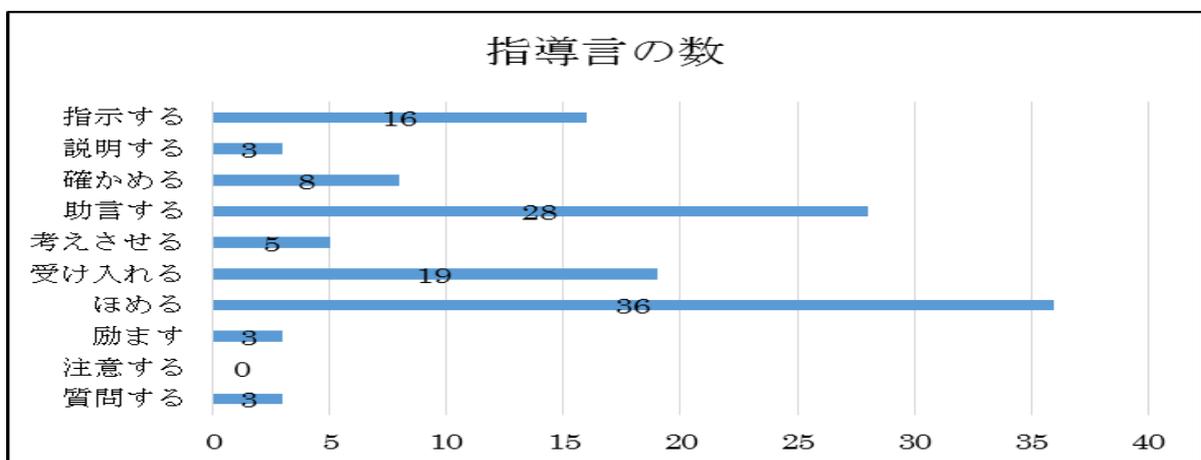
#### 〈リズムのかずし〉

- ・みんなちがうタイミングで ・速くゆっくり ・見せたいところはスローモーションで
- ・ストップを入れる ・一定のリズムをつくらない ・最後までこだわって動く ・強い動きと弱い動き
- ・激しい動きと繊細な動き

#### 〈人間関係のかずし〉

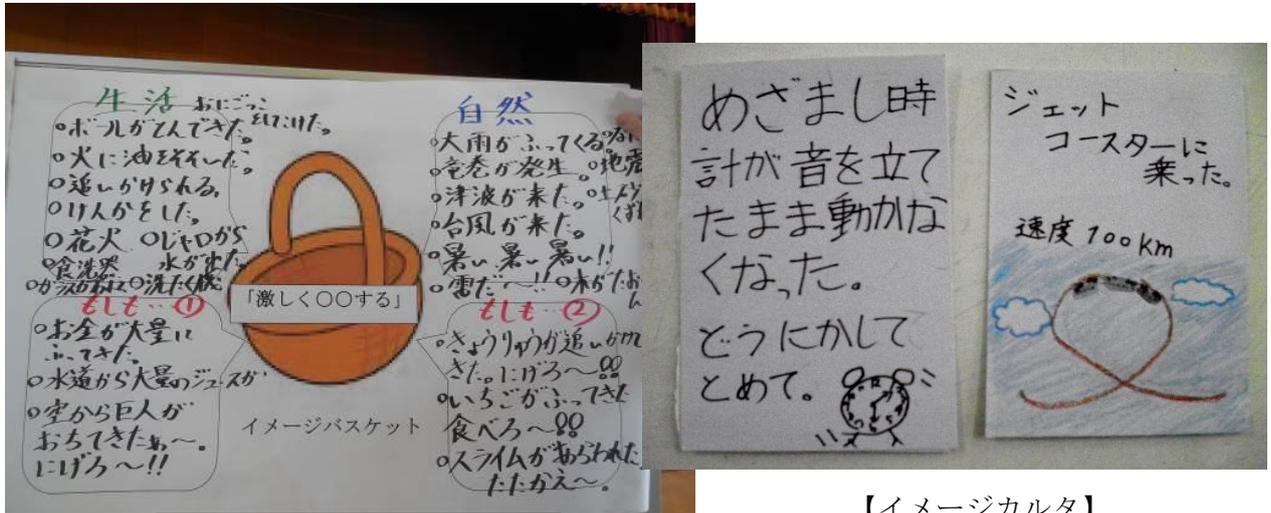
- ・わざと人とのタイミングをずらす ・友達とくっついたりはなれたりくぐったり ・目と心でつながろう
- ・いつでもだれとでも踊れる ・メインを引き立たせるためにサブはどんな動きができるか
- ・友達のよい動きは真似しよう ・友達のよい動きをアレンジして使う ・かけ合いを楽しもう

実際の授業では指導言集を参考にしながら、そのときの子どもの動きに合わせて言葉かけをしていった。グラフからわかるように実際の授業では、「表情がよくなったよ。」「〇〇くん、～が上手だね。」といった“ほめる”言葉かけや、「もっと回ってごらん。」「高い低いを意識して動いてごらん。」といった“助言する”言葉かけ、「なるほど、足だけでやるんだね。」「すごく激しい地震ができそうだね。」といった“受け入れる”言葉かけが多かった。指導言を意識して、よい動きを指導言にこだわりすぎた結果、動く前に考えてしまう子どもが多くなり、踊る楽しさを味わうというところから離れてしまった。



### (イ) イメージづくりのためのイメージバスケット、イメージカルタ

本単元のオリエンテーションで、日常生活や空想の世界での「激しく〇〇する」を「生活」「自然」「もしも〇〇が・・・」の3つのテーマで一人一人のイメージを出し合いイメージバスケットをつくり、個人のイメージをクラス全体に広げたり、友達のイメージを聞くことで、個人のイメージを広げたりした。また、イメージバスケットをもとにして子どもたち一人一人が作成したイメージカルタを使い、即興表現も行った。



【イメージバスケット】

【イメージカルタ】

### ③ 言語活動の充実

#### (ア) 参加型見せ合い (サポート)

表現運動ではグループで動きを作っていく段階で必然的に言語活動が行われる。その言語活動は動きを伴ったり、時には視線だけで気持ちを合わせたりすることもある。本研究ではそれに加えて、きょうだいグループでの見せ合いの際に、お互いの動きをサポートする活動を入れることで、より多くの言語活動を行える場面を設定した。自分たちの表したい動きがより引き立つようにきょうだいグループにしてほしい動きを頼んだり、きょうだいグループの表したい動きがより引き立つようにサポートしたりと、双方向での交流ができるようにした。このような言語活動を通して、友達の動きのよさに気づいたり、友達の動きに合わせて自分の動きを作ったりすることをねらった。



#### (イ) 「わたしたちの体育」の活用

特に活用した点に、振り返りでの活用が挙げられる。「学習のあしあと」のページに書いた振り返りを活用し、学習を進めた。「学習のあしあと」は、3つの視点で振り返りを行うことができるようになっている。また、感想を書く欄もあり、良い動きに着目している感想を全体に紹介することができる。感想を紹介することは、学習意欲を高めたり、課題を見つけたりする一助となった。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

○表現の学習に取り組んでから、男女間の関係が変わってきた。徐々に自然にかかわり合えるようになり、学級活動でも男女が協力する場面が増えてきた。

○表現の学習に苦手意識を持っている児童には、「○○になってみよう。」など、取り組みやすい動きづくりから始めた。全体の雰囲気も支えとなり、苦手な児童も動けるようになってきた。

○毎時間撮影したビデオを見合ったり、「わたしたちの体育」に1時間毎の振り返りに朱書きを入れたりするなかで、児童自身の意識も高まり、動きも変わっていた。

○ダンサーズボードの活用によって、「4つのくずし」を意識しながら、児童は動きを高めることができた。

○「サポート」は、レベルが高くて難しいのでは、と思っていたが、即興的に児童は、メインの動きを引き立てるよう動いていた。



#### (2) 課題

○イメージづくりのために、イメージバスケットやイメージカルタの活動に取り組んできたが、今回「たたかい」をテーマにしたグループの動きは、イメージも動きも広がりにくかった。テーマやストーリーを決めていく上では、児童の思いを優先しつつも教師のかかわりが必要になってくる。

○「サポート」をする目的は、身につけさせたい動きに迫るためであり、楽しさをともに共有していくためである。また、教授する力をつけるためでもある。だからこそ、動きのイメージを明確にするためにも、まずお互いのひとまとまりの動きを親身になって見て、それから話し合う場をしっかりと位置づけてもよかったのではないかな。

○本時の目標が、「はくりよく」だったのなら、一番表したいイメージにつながる動きをまずやってみたらよかった。「はげしい動き」をはじめ・中・おわりと3つに分け、一番はげしい部分を考えてはじめとおわりをつけたら、強調する動きもひとまとまりの動きもよりよいものになったのではないかな。

○指導言としての言葉にとらわれすぎてしまった感があった。動きのきっかけづくりとしての言葉でありたい。教師が、児童の動きを解説している場面が見られたが、まずは、教師自身が動いてやる、見せることが大事である。

○言語活動の充実を重点に置いているが、表現領域としての言語活動をどう捉えるのか、今後の課題である。

